

氏 名 三島 優子  
学位の種類 博士（医学）  
学位記番号 乙第273号  
学位授与年月日 平成21年3月5日  
審査委員 主査 教授 藤田 委由  
副査 教授 齊藤 洋司  
副査 教授 小林 裕太

### 論文審査の結果の要旨

機能性胃腸症は胃排出遅延がその病因の一つとして考えられている。摂取食事温度が胃排出能に影響を及ぼすのであれば、摂取食事温度の指導が症状改善に有効である。それ故、摂取食事温度と胃排出能の関係の検証は重要であると考え。今回、健常人を対象に流動試験食と固形試験食について試験食温度が胃排出能に及ぼす影響を検討した。各試験食温度の胃排出能への影響は健常人25名（流動試験食：25名、平均年齢 $35.7 \pm 9.6$ 、男女比=22:3、固形試験食：25名、平均年齢 $35.2 \pm 8.8$ 、男女比=20:5）を対象にクロスオーバー法にて検討した。試験食温度が $4^{\circ}\text{C}$ 、 $37^{\circ}\text{C}$ 、 $60^{\circ}\text{C}$ の流動および固形試験食の胃排出能を $^{13}\text{C}$  酢酸呼気テストを用いて測定した。 $^{13}\text{CO}_2$  呼気排出曲線より $T_{\max}$ 値（呼気中の $^{13}\text{CO}_2$ 濃度が最高になる時間）、 $T_{1/2}$ 値（呼気中の $^{13}\text{CO}_2$ 排出量が2時間に排出された $^{13}\text{CO}_2$ 量の1/2になる時間）、 $^{13}\text{CO}_2$ 呼気排出速度を計算し、胃排出能を評価した。試験食温度が $60^{\circ}\text{C}$ の流動試験食と固形試験食は、試験食温度が $37^{\circ}\text{C}$ の流動試験食と固形試験食に比べて $T_{\max}$ 値が有意に低下した。しかし、 $T_{1/2}$ 値ではこのような傾向が認められなかった。流動試験食による $^{13}\text{CO}_2$ 呼気排出速度の解析では、 $60^{\circ}\text{C}$ の流動試験食による $^{13}\text{CO}_2$ 呼気排出速度は $4^{\circ}\text{C}$ と $37^{\circ}\text{C}$ の流動試験食による $^{13}\text{CO}_2$ 呼気排出速度に比べて食後30分以内により大きな値を示した。これらの結果より、 $60^{\circ}\text{C}$ 試験食は $37^{\circ}\text{C}$ 試験食に比べ胃排出能が有意に亢進していることが認められた。摂取食事温度の調節は機能性胃腸症患者の食事療法に有用であることが示唆された。